

日本語で書く論文の価値と難しさ



久保 拓也

この度、分析化学誌の編集理事に就任いたしました。就任にあたり、日本語論文の重要性について改めて考える機会をいただきましたので、現時点での考えを述べさせていただきます。

皆様ご存じの通り、生成 AI の発展にともない、論文執筆の在り方は近年大きく変化してきました。従来は、自ら多大な労力をかけて英文原稿を作成し、有償の英文校閲を利用して原稿を整えたくて投稿論文を完成させるのが一般的でした。それでもなお、外国誌の査読においては、“Poor English”といった指摘を受けることが少なくありませんでした。しかし現在では、適当な日本語で研究の背景、目的、結果、考察を整理し、生成 AI に入力することで、一定水準の英文原稿を比較的短時間で作成できるようになっています。さらに生成 AI は、著者が明示していない関連情報を補足し、学術論文にふさわしい表現へと整える機能も有しています。その結果として、著者本人の理解や表現力を上回る完成度の原稿が生成される可能性も生じています。

一方で、私が研究者として歩み始めた当手を振り返りますと、まず日本語で内容を正確かつ論理的に構築し、その内容をもとに時間をかけて英文へと翻訳し、さらに教授による内容および表現の確認を経て、ようやく投稿論文を完成させることができました。この過程には多くの時間と労力を要しましたが、同時に、自身の研究内容を深く理解し、他者に伝わる形で表現する力を養う重要な訓練でもありました。こうした経験を踏まえると、若い段階において、自らの研究成果を正確な日本語で表現する能力を身につけることの重要性を、改めて強く認識するに至っています。

私は現在、研究室の学生に対して生成 AI の積極的な活用を推奨しています。これは、これまで多大な時間を要してきた文献調査や情報収集の負担を軽減し、その分、自ら実験を行い、新たな知見を得る活動に多くの時間を割いてほしいと考えているためです。しかしその一方で、自身の実験から得られたデータを正しく解釈し、第三者に分かりやすく伝えるためには、まず日本語において平易で論理的な文章を書く力が不可欠であることも、繰り返し指導するように努めています。生成 AI を適切に活用するためにも、基盤となる言語能力と理解力が重要であることは言うまでもありません。

本会には、研究成果を発信する場として、英文誌 Analytical Sciences と邦文誌である分析化学誌が用意されています。会員の皆様におかれましては、とりわけ初めて学術論文を執筆される際には、日本語で論文を書くことの意義と価値を再認識していただき、多くのご投稿を賜れば幸いです。そしてその次の段階として、英文論文の執筆にも挑戦し、Analytical Sciences への投稿を通じて、本会のさらなる発展にご協力いただければと存じます。

〔KUBO Takuya, 京都府立大学大学院生命環境科学研究科, 分析化学誌編集理事〕